

# 木の日の研修 報告

2月の木の日の研修報告をします。

【日時】2020年2月6日(木)18:30~20:35

【開催場所】中野区桃園区民活動センター 2階会議室

【講師】福嶋司氏(東京農工大学名誉教授)

【参加者】58名(FIT会員53名、友の会1名、神奈川会1名、埼玉会3名)

【報告者】29年福樹会 飯島雅巳

タイトル:「日本の多様な自然植生と自然の保全について」

【内容】

## 1. 日本の自然植生の構造

沖縄のやんばるの森から冷温帯のブナ林、亜高山のコメツガやオオシラビソなど、日本の植生は水平的・垂直的な3つの植生帯(常緑広葉樹林帯、落葉広葉樹林帯、常緑針葉樹林帯)を形成している。日本の緑の構成は植林地や二次植生などが多く自然植生は少ない。

## 2. 植物群落は動いている・・・植生遷移

攪乱を受けた生物群集は元に戻ろうとして変化する。

ある生物群集が時間とともに他の生物群集に移り変わることを生態遷移といい、環境条件(栄養塩量や光の量)が時間とともに変化するにつれ競争力の異なる種が遷移していく。

最終的に気候とつり合って安定した生物群集が極相。

## 3. 植生管理

植生管理には、雑木林や阿蘇・久住のススキ草原など手を加えることで護る管理、高山やブナ林・湿原など手を加えないで護る管理、破壊された自然の再生と復元を図る植生修復のための管理がある。放置されている雑木林にはシラカシやアオキが入り込みその姿が荒れているといわれるが、元の姿に戻ろうしているだけ。

自然林内部は空間的に再生のため複合体になっている。倒木などによるギャップができると実生が育ち、若木を経て成熟し林が更新する。ブナ林も同様に更新するが、種子の豊凶や散布範囲の狭さ、食害など、生育段階においても菌や積雪・食害などいろいろな困難が待ち受けている。

## 4. 玉原高原のブナ林の調査

沼田市にある玉原高原でブナの種子はどれくらい生産されどれくらいの距離に散布するのか、自然散布されたブナはどれくらい生き残り更新に寄与する可能性があるのかについて調査を行なった。

結果、種子は幹から8mまでにほとんどが落下するが、年により結実数は異なり繁殖力を持たない「しいな」の割合が多い。個体間の差が大きく、同じ個体でも年による差が大きい。

強伐採地やパッチなど林冠に隙間があるところは稚樹が多数生育し成長が良好だが、安定したブナ優占林は林冠が閉鎖しているため実生は多数あるが稚樹への成長は期待できない。

## 5. 玉原高原のブナ林の復元活動

戦後のブナ林の伐採から放置されることでササが密生してしまい、自然の力による復元は困難ということで人為的にブナ林を復元させるため活動している。

動物による食害や雪害など思うようにはいかないが、食害を防ぐためにはササがある程度必要であること、雪害を防ぐために稚樹を斜めに植えるなど試行錯誤を繰り返しながら進めている。

## 6. 玉原湿原の復元活動

調査を開始した 1989 年は木道や人工排水路で水の流れが止められることにより乾燥が進み、それらを境に植生が異なっていた。そこで、人工排水路に堰を設けたり湿原中央に設置されていた木道を撤去したりすることにより湿原植物群落回復を図った。

結果、湿原の植物群落の均質化が進み低木群落から湿原群落へ移行などが進んでいるが、湿原の復元は難しく、継続的なハイヌツゲやヌマガヤの刈り取りが必要である。さらにシカ被害から守るために防鹿柵の設置も早急に必要。

以上



植生の遷移について話を聞く



生態遷移のメカニズムについて話を聞く